
喫茶「アキラ」

上月茉莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喫茶「アキラ」

【Nコード】

N7485S

【作者名】

上月茉莉

【あらすじ】

私の通う喫茶店のマスターは…。

(前書き)

オチが通じなかったらすみません。

「アキラ」と言う小さな喫茶店が通勤途中にある。マスターの名前を使ってアキラの様だ。

私はそのコーヒーと寡黙なマスターが作り出す雰囲気が好きで、毎朝の様に通勤前そこでコーヒーを頂く事にしていた。

朝その喫茶店の扉を何時もの様に潜る。カウベルの音が響いた。

「……いらっしやいませ、小泉さん」

流石に寡黙なマスターと言えど、客への挨拶はきちんとしているし常連客の私の名前を最後に付け足す。

私はマスターのこういう所が好きだった。薬指に指輪が光る私なので、異性であるマスターには恋愛感情は抱かないけれど。

私は慣れた様子で誰も居ない店内を歩き、窓際のカウンターに腰を下ろした。思えば朝早くから営業している店だ。会社の帰りに店を覗くと客の入りは良いみたいだが、朝に私以外の客を見た事は無い。

「マスター、何時もの下さい」

クラシックの響く静かな店内で私は言った。常連客を気取ってみると言うのは子供の頃からの憧れでもあった。

マスターは何も言わずにコーヒーを入れる支度を始めた。伝わったと理解した私は、窓の外の行き交う人々を見る。小学生が集団登校していたり、老夫婦が散歩を楽しんでいたりと、窓の外の景色は飽きる事がない。

少しして私の机にコーヒーカップが置かれた。それに気付いて私は慌てて頭を下げる。マスターは私の好みをきちんと判っているみたいなので、カップの横には私には適量のスティックシュガーが添えてある。朝から糖分が欲しくなる私はどちらかと言えば甘党だと思う。しかし真の甘党と言うのは度が過ぎると呆れを覚える物である。妹は紅茶にスティックシュガーを4本入れる。これは呆れた。

私がそんな下らない事を思い出しながらコーヒーを頂いている間、寡黙なマスターは寡黙なまま喋ろうとはしなかった。それでいい。私は喋りに来た訳ではないから。

「コーヒーを飲み終えた私は立ち上がりマスターに向かって、小さく笑みを浮かべ御辞儀をする。」

「行って来ます」

「行ってらっしゃい」

私はマスターとのこの短い応酬が好きだ。顔を上げてマスターの表情を見ると、彼女は朝の光の中笑みを浮かべていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7485s/>

喫茶「アキラ」

2011年10月9日00時47分発行